

平成 30 年 6 月 13 日現在

機関番号：35307

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2017

課題番号：16K13542

研究課題名(和文) 教職キャリアにおける発達課題の基礎研究

研究課題名(英文) Some themes for Japanese teacher's career development.

研究代表者

高木 亮 (TAKAGI, Ryou)

就実大学・教育学部・准教授

研究者番号：70521996

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：日本の教師の入職から退職までの期間のキャリアの発達課題を検討した。平成28年までは主に発達課題とその失敗による危機を幸福度やストレスの状況を意識しつつ調査・検討した。平成29年度以降はそれらの発達課題・危機が年齢や経験に基づいたキャリア発達段階により質的に変化することを踏まえ、発達段階に関する基本的議論に重点を置いている。

平成29年度中に中学校・高校教師の視点から見た6段階の教職キャリア発達段階仮説を提案した。その上で小学校教師の視点から見た6段階の教職キャリア発達段階仮説の修正議論も行った。現在は調査研究を踏まえた養護教諭の視点からのモデル修正の議論を行っている。

研究成果の概要(英文)： We studied the developmental issues of Japanese teacher's careers in the period from the entry and retirement. Until 2016, we investigated and examined developmental themes, crises, happiness and stress. Since 2017, emphasis is placed on basic discussions on the developmental stage among Japanese teacher's.

In 2017, we proposed six stages of teaching career development stage hypotheses from the viewpoint of junior high school and high school teachers. And, we also discussed and revised the six-stages of teaching career development hypothesis from the viewpoint of elementary school teachers. Currently we are discussing model modification from the viewpoint of "Yougo teacher"(nursing teacher) based on research research.

研究分野：教育経営学

キーワード：教職キャリア 教師の発達課題 教師の発達段階 発達課題と危機 教師の幸福 教師のメンタルヘルス

1. 研究開始当初の背景

本研究企画の申請を行った2015年月中旬はいわゆる「馳プラン」による中央教育審議会答申『「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員養成コミュニティの構築に向けて～」』（平成27年12月）公表前である。教師の職業生活全体を通じた成長・発達だけでなく健康や幸福を包括して「教職キャリア」の理論的枠組みを提案する社会的意義があった。教職キャリアのモデル提示は科学的根拠の蓄積の上では未だなされていない。特に中長期のキャリアを考える上での分析方法が発展途上である。一方でストレスや精神疾患の予防・対策論についてはすでに量的研究も多数蓄積されており、その背景を踏まえて教師が“健康に”そして“職業上の活躍や職務の充実”を展望することを議論のスタートとした。

研究企画申請時に教職経験を有する研究者である藤原忠雄(研究分担者,兵庫教育大学教授,元高校教員)と清水安夫(研究分担者,国際基督教大学上級准教授,元中学校教諭),長谷守紘(研究協力者,愛知県中学校教諭)が協議して設定した「6段階の教師の発達課題仮説」の提示を行った。その教職経験者発の仮説検証が研究企画の中心である。

2. 研究の目的

2015年頃の研究と教育政策を背景に教職キャリアの職種・職階や経験年数などの違いも包括できる総合的な発達課題理論を提示することを目的とした。そのために「6段階の教師の発達課題仮説」を検討した。ここでいう“総合的”とは“健康・ストレスや幸福,職業・私生活の充実といった諸々の目的変数のいずれかを大きく損なうことがないように可能な限り両立して確保する視点”を意識している。その上で,4つの視点を設定した。

(1)学際的批判を受けたモデル改善

教育政策や教育行政(人事や教育センターの研修等),学校経営,教師個人の自己管理・支援(キャリア発達や職業・私生活の両立等),臨床心理学(病的状態の予防・治療的対応等)の学際的視点からの批判を受けたモデルの改善議論を公開の場で行い記録する。

(2)学校・教師の文化・価値観への配慮

学校や教師個人の文化・心理の仕組みを踏まえ量的検討で“ストレス予防”以外の職業生活に前向きになりうる目標を探索する。

(3)中長期キャリアの測定方法の探索

量的検討では把握が難しい,中長期の職業生活の「今まで」と「これから」を測定することができるか方法論を探索する。特に面接を通じた支援に長じている臨床心理学研究者が検討を行う。特に急速に発展している描画を通じた分析手法(TEMやライフラインさらに聞き取り内容のチャート化)に注目した。

(4)最低限の健康確保方法論の探索

特に「高ストレス」や「高疾患リスク群」の教師の実情に注目する。ストレス問診・電

話相談サービスを行う民間企業への聞き取り調査等を通してストレスが深刻な教職員の現状を整理し,最低限の健康確保からみたキャリア発達課題を議論する。

3. 研究の方法

(1)学際的な批判の収集

清水の主導で日本学校メンタルヘルス学会第20回大会機関誌編集委員会主催シンポジウム「学校メンタルヘルスに関する問題点の国際比較」(2017年2月)にて「6段階の教師の発達課題仮説」のモデルを提案し批判や修正に関わる議論を得た。また,この機会ですらから協力者を得て養護教諭や小・高校教諭ら研究協力者を得た。さらに,日本学校メンタルヘルス学会機関誌『学校メンタルヘルス』において投稿掲載が認められ,別途紙面で会員からの批判受付の機会を得た。あわせて,小学校・教育センター勤務経験を有する研究者や若手教育法規研究者・教育政策研究者らより批判と改善余地の議論を受けた(雑誌論文等)。この他にも,2018年5月現在,複数の書籍出版企画や論文投稿審査中であり,助成申請や査読意見を受ける形で批判を受けたモデル修正の途上である。

(2)学校・教師の感じる幸福・充実の検討

従来のもストレスやストレス反応に関する質問項目に加え,「去年の幸福度」と「今年の幸福度」,経験年数,性別などを測定する有効回答690人の調査(教諭=519人,管理職=80,養護教諭=53,教育事務職員=38)を実施した。幸福とストレスの同一性と独立性を検討するとともに,これらを認知する背景としての教師個人や学校風土の状況を探しつつ,年代ごとのストレス・幸福の推移について検討を行った。

(3)描画によるアセスメント方法の探索

量的には検討が難しい,個々人の教師の「今まで」と「現在」,「未来への希望」からなるキャリアについてできるだけ客観的な議論が可能となるような描画の分析方法を試行していくこととした。長谷が専門としてきたTEMと高田純(研究分担者,香川大学講師)が専門としてきたライフライン法を用いて幼稚園教諭と小学校教諭,中学校教諭,高校教諭,養護教諭,特別支援学校教諭についてそれぞれ1名を平成29年度末までに聞き取り調査を行い,描画分析を行い,論文投稿中ならびに執筆中である。

(4)労働者の健康確保に関する議論

労働安全衛生法改正に基づくストレスチェックが学校単位で実施義務となり,その実施を担う企業とその顧客(3市区町教育委員会と2教職員共済組合)に対して高木が聞き取りや実態調査を行った。その上で,他の公務員(特に公安公務員)と比べての学校・教職員の特殊性の整理を協力企業とともにを行った。また,教師の勤務実態やストレス,動機づけ,幸福・充実などの先行研究をレビューし,これらの理論的性質と今後の分析課題を

一章として寄稿した書籍が印刷中である。

4. 研究成果

(1) 発達段階と発達課題 VS 危機の提案

教師の発達段階は、想定6段階に加えて、教員採用前を「0ステージ」とした「0+6段階の発達課題仮説」を2018年夏公刊予定の藤原らの論文で提案した(図1)。0期の課題は「教職に就くことへの希望」である。養護教諭以外の教諭については採用以降、数年ごとの区切りで「教職を一生の仕事にすることへの安心」次いで「職務遂行の確実性」などの課題を提案した。また、ミドルリーダー期においては「年単位の勤務先の課題をこなすことへの自信」、「ミドルリーダーとしての有能感」さらに「管理職を選択するか否か等の定年までのキャリア展望に関する自己一致」を設けている。定年を控えた期間は「自己のキャリアを振り返った際の満足」とした。なお、養護教諭は担任や職階制を有さないことや女性教諭全般のワークライフバランスは男性や管理職キャリアを通過する女性と感覚が異なることが指摘されている。また、教育法制研究者からは臨時任用も含めて初任時のキャリアルートの多様性を考慮する必要が指摘された。以上の視点から、発達課題には主観的妥当性があるものの、量的検証等の客観的妥当性の把握が必要であることが確認された。今後、量的検証を行う際に、ある程度冗長性を有しながら定義の明確な発達段階(キャリアステージ)の区切りを議論する必要性が確認された。

6段階の教職キャリアの発達段階(ステージ)仮説と各キャリアリソース



図1. 6段階の発達課題(雑誌論文)

(2) ストレス過程と幸福感は別概念

教師のストレス・ストレス反応と幸福度に関する量的検討の結果、教師の幸福度は一部のストレス反応と強い負の相関があることが示された。一方で、幸福度は一部のストレスが原因となり向上することや高ストレス・高ストレス反応群においても感じる比率の高さが確保されていることが示された(図2)。つまり、教師の幸福度は「ストレスが高い状況で成立する場合」もありうる。そのため、「ストレスを抑制することが教師の幸福度を高める」とは一概に言えない一方で、「幸福度を感じるために健康が危険な状況になる」といわれるワーカーホリック的な状況も想定されることが示された。このことより、教師の発達課題を目指した中長期のキャリアを考える上で、要注意要素としてのストレスとは別に、前向きさを確保す

る上で有益な幸福度を高める工夫づくりが有益であるとの議論を行った。このあたりの議論は2018年度刊行予定の書籍に寄稿し、現在校正中の段階である。

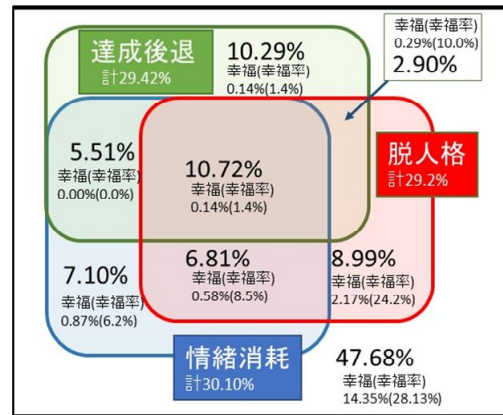


図2. 高ストレスと幸福発生率(書籍印刷中)

(3) 複数の描画キャリア・アセスメント方法

臨床心理士である高田と長谷が各教職種の経験者にそれぞれ6時間以上の聞き取り調査を行った。調査協力者もあわせて議論した結果、キャリアの転機を考えるTEMと健康や幸福度をある程度数量的にはかることができるライフライン法のそれぞれ固有の性質が認められた。また、キャリアの経験から得られるソーシャルサポートや職能などの獲得資源はTEMでもライフラインでも把握できず、チャートを描く様なエピソード整理の手法も別途必要としている。状況を踏まえながらも可能な限りこれら3つの描画測定法を併用ないし使い分けることが有益であると結論づける議論の論文を執筆中である。なお、作成した結果の1つを図3に記載する。

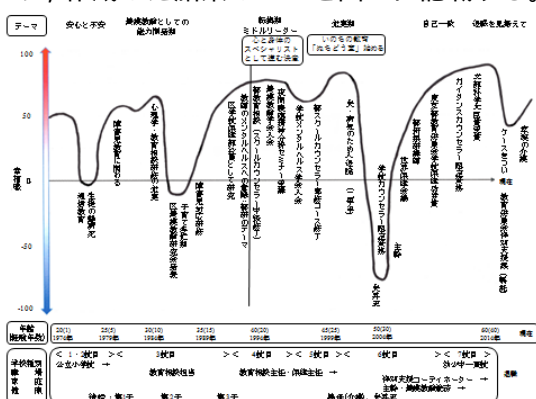


図3. ある養護教諭のライフライン(雑誌論文印刷中)

今後は数量化やデータの大量収集を可能にする工夫が必要である。例えば、教員免許更新講習や教育センターの研修で回答者にも充実感を持って行えるような簡易方法論化と一斉に分析ができる仕組み作りといった規格づくりを発展研究に展望している。

(4) ストレスチェック追加測定項目群の提案

平成28年度に実施となった労働安全衛生法改正による「ストレスチェック」制度では厚生労働省推奨の『職業性ストレス簡易調査票』56項目(または21項目)が示された。教

師の職業ストレス研究は500近くを数えるが、上記『職業性ストレス簡易調査票』を用いた研究はあまり蓄積がなく、また、類似概念と別の概念の整理がなされていない。そこで、本企画に基づき今までの教師ストレス調査の総合レビューを行った(図書 第一部)。また、『職業性ストレス簡易調査票』と類似する教師ストレス先行研究類似概念と独自性のある概念の整理を行った。『職業性ストレス簡易調査票』では測定されていないが、あわせて測定することが有益といえる「教職員職種にあわせた職務ストレス」や「幸福感」、「職員室職場環境」、「地域・保護者対応」等の簡易尺度の提案を行うレビュー論文を投稿中である。以下の図4はその投稿中の論文に添付した『職業性ストレス簡易調査票』に類似する概念と独立性が強く追加を提案する概念を整理した一覧表である。

| 研究分野 | 項目 | 内容 | 備考 |
|------------------------------|-----------|--|--------------------------------------|
| 「いわゆる「職業ストレス」に関する諸研究 | 職務の負担(量) | 「業務量(仕事の量)が増えれば増える、増加に伴って負担も増える。」「業務量は増えれば増えるが、業務の内容ややり方によっても異なる。」 | 「平成18年度文科省委託調査研究(大規模公開統計) 各校の多岐研究あり」 |
| | 職務の負担(質) | 「仕事の量が増えるだけでなく、仕事の質ややり方によっても異なる。」「業務の質ややり方によっても異なる。」 | 「いわゆる「職務ストレス」 |
| | 職務の負担(環境) | 「仕事の量だけでなく、仕事の環境によっても異なる。」「業務の環境によっても異なる。」 | 「いわゆる「職場環境ストレス」研究は多数あり」 |
| 「いわゆる「ストレス反応」に関する研究 | 職務の負担(量) | 「仕事の量が増えるだけでなく、仕事の質ややり方によっても異なる。」「業務の質ややり方によっても異なる。」 | 「いわゆる「バーンアウト」(B) MBI)や「総合的ストレス反応」 |
| | 職務の負担(質) | 「仕事の量だけでなく、仕事の質ややり方によっても異なる。」「業務の質ややり方によっても異なる。」 | 「いわゆる「バーンアウト」(B) MBI)や「総合的ストレス反応」 |
| | 職務の負担(環境) | 「仕事の量だけでなく、仕事の環境によっても異なる。」「業務の環境によっても異なる。」 | 「いわゆる「バーンアウト」(B) MBI)や「総合的ストレス反応」 |
| 「ソーシャルサポート研究(逆転、職場対人ストレス研究)」 | 職場対人ストレス | 「職場対人ストレスは、職場での人間関係によって発生する。」「職場での人間関係によって発生する。」 | 「いわゆる「知覚されたソーシャルサポート」研究は多数あり」 |
| | 職場対人ストレス | 「職場対人ストレスは、職場での人間関係によって発生する。」「職場での人間関係によって発生する。」 | 「いわゆる「知覚されたソーシャルサポート」研究は多数あり」 |
| | 職場対人ストレス | 「職場対人ストレスは、職場での人間関係によって発生する。」「職場での人間関係によって発生する。」 | 「いわゆる「知覚されたソーシャルサポート」研究は多数あり」 |

図4. ストレスチェック追加尺度の提案 (雑結論文投稿中)

(5)今後の課題
 挑戦的萌芽性と学際性を意識して教師の発達課題を検討した本研究企画は以下のような今後の課題を提示する。
 発達段階の規定とその数量的検討
 特に、養護教諭と他の教職種を分けた段階分けやモデルづくりが現実的である。また、教師個々人が調査に回答することに強い抵抗を持つ私生活の負担がキャリアに大きく反映される状況も聞き取り調査で明らかにされた。発達段階やそれぞれの発達課題・危機においてワークライフバランスにも配慮した発達段階ごとの検討が今後の課題である。
 発達促進要因としての幸福度への着目
 教師には若干の生徒指導の困難さの認知などがむしろ幸福度向上に有益であることも示された。また、「今日は良い日だったと思う日が多い」などの質問項目と幸福度は強すぎる相関関係を有していた。これらから、「幸福は『なる』ものではなく、『感じる』もの」として捉えることもできる。その上で幸福度を感じやすい地域教育経営や単位学校経営をデザインすることでキャリアの前向きさや職能開発が向上しやすい状況を設定できる方向性が確認できた。一方で幸福を

感じるためにストレスが見えにくくなり、心身が蝕まれるメカニズムも存在する恐れがある。“ 幸福度を感じ、ストレスを溜めすぎない教育行政と学校経営、臨床支援体制 ”を今後、数量的に検討することが課題である。

描画キャリア・アセスメントのデータ蓄積文章の質問にリッカート法等での数量的回答を求め統計的な分析を行う調査法だけでは、中長期のキャリアが十分に把握しえない。一方で、個々人が持つ固有のキャリア分岐点での選択を把握できる TEM や幸福感の向上・急落をエピソードごとに整理し現在の位置を確認するライフライン法は質問項目の尺度等では把握しにくい中長期の過程を測定可能であることが確認された。今後はこれら描画でのキャリア・アセスメントの結果をデータとして収集し、例えばキャリア分岐の類似エピソードのカウントやライフラインの幸福度・不幸度の面積の数量分析など、描画や質をある程度数量データに転換し統計的な議論をはかることが今後の課題である。

ストレスチェック制度の積極活用
 今までには研究の文脈で教師のストレスや精神疾患リスクの測定がなされてきた。しかし、平成28年度からは一定規模の職員数の事業所でストレスチェックは実施義務となり、ストレス改善の経営を進めることが求められる。事業所は学校にも当てはまる。時代は全職種共通のストレスチェックを一齐に測定し、各職場からその分析や改善が提案されるストレス改善実践の時代に変化しつつある。全職種共通尺度を用いることは、学校や教職員特有の事情に把握しきれない部分が存在すること。また、公私生活の両立(ワークライフバランス)やキャリア展望、幸福度などの「前向きに働く心理・態度」のリストを提案したことが本研究企画の成果であった。今後はこの学校特有の事情や「まえむきに働く心理・態度」をストレスチェック等の文脈で学校で実施し学校ストレス改善の文脈で実践を進め報告していくことが本研究企画の発展として重要である。

5. 主な発表論文等
 (研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計12件)
 高木亮・門原眞佐子、「へき地の学校園を支える社会関係資本」、『就実教育実践研究』10,2017年, pp.61-71.
 門原眞佐子・高木亮、「次期『学習指導要領』と『幼稚園教育要領』改訂を控えての日本の学校園の課題 人口減少と教育方法の刷新に注目して」、『就実論叢』47,2017年, pp.121-136.
 藤原忠雄・高木亮、「広義のメンタルヘルス」としての教職キャリア」、『学校メンタルヘルス』査読有,20(1),2017年, pp.14-17.
 清水安夫「教師のキャリアステージにおけ

る課題の研究」、『学校メンタルヘルス』査読有，20(1)，2017年，pp.11-13.

高田純「発達課題説の意義と教職キャリア」、『学校メンタルヘルス』査読有，20(1)，2017年，pp.22-24.

長谷守紘「教師のキャリアを描画する分析手法の開発と展望」査読有，20(1)，2017年，pp.18-21

佐々木かよ子・藤原忠雄「東日本大震災被災地でのストレス場面と教育プログラムの効果の検証 養護教諭が関わる保健教育の実践的研究」『ストレスマネジメント研究』13(2)，査読有，2017年，pp.85-94.

藤原忠雄「新年度当初の教師ストレス」『教育と医学』65(4)，2017年，pp.300-306.

波多江俊介「教師のキャリア発達段階仮説構築の困難性」、『学校メンタルヘルス』査読有，20(2)，2018年，pp.219-220.

門原眞佐子・高木亮「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策を果たすための設置者に求められる課題」、『就実論叢』47，2018年，pp.131-142.

高木亮「昭和末から平成元年代の学歴・学校歴意識と生徒指導問題の変遷」『就実論叢』48，2018年，pp.189-199.

草海由香里・清水安夫「職場におけるいじめ問題の客観的認知と主観的認知の相違に関する研究」、『ストレスマネジメント研究』査読有14(2)，2018年(印刷中)

〔学会発表〕(計12件)

高木亮「改正労働安全衛生法『ストレスチェック制度』導入による教育経営上の対応課題」日本教育経営学会第56回大会，2016年

高木亮(企画)「(自主シンポジウム)保育・教職キャリアを支える対人関係資本」，日本教育心理学会第58回総会，2016年

高木亮「日本の21世紀の学校と学力の『リアル』とメンタルヘルス論への期待」，日本学校メンタルヘルス学会第20回大会機関誌編集委員会企画シンポジウム話題提供，招待有，2016年

Yasuo SHIMIZU, Yoshiyuki TANAKA, Toshiaki SASAO, Akira TSUDA, Yu NIIYA, Yi SUN, Joonha PARK, Naoki HATTA 1Recent Advances: Cross-cultural Adaptation and Well-being. Japanese Association of Health Psychology Annual Conference at Meiji University in Tokyo, October 2017. International Committee invited symposium.

高木亮「教師の幸福度を規定する校内社会関係資本とストレスサーの関係」日本教育経営学会第57回大会，2017年

高木亮「教師の健康概念の再検討 - 不健康とQOL・幸福といった諸概念の展望 - 」九州教育経営学会第98回定例会，2017年

高木亮「教師の“広義のメンタルヘルス”の検討」日本学校メンタルヘルス学会第21回大会，2017年

高木亮・高田純・藤原忠雄・長谷守紘・清水安夫・門原眞佐子「教職キャリア発達段階仮説の提案」日本教育心理学会第59回総会，2017年

長谷守紘「教師のキャリアを描画する分析手法の現在と展望」日本教育心理学会第59回総会，2017年

高木亮「教師の「幸福度」調査から考える学校改善のポイント」日本学校改善学会第1回大会，2018年

花房幹根・村上幸輝・増成悠太・高木亮「先生の「嫌われる」「好かれる」言動が青年期の学級風土と幸福感維持に与える影響」日本学校改善学会第1回大会，2018年

佐藤福起・日下公貴・高木亮「へきち自治体におけるICTを活用した学習支援の可能性」，日本学校改善学会第1回大会，2018年

〔図書〕(計3件)

高木亮，ナカニシヤ出版『チーム学校園を支えるための教師ストレス研究』，2018年3月，115頁

清水安夫「身体的健康と学校メンタルヘルス」，日本学校メンタルヘルス学会編，大修館書店『学校メンタルヘルスハンドブック』2017年9月，pp.292-297.

清水安夫「貧困と子どものメンタルヘルス」，日本学校メンタルヘルス学会編，大修館書店『学校メンタルヘルスハンドブック』2017年9月，pp.309-315.

〔産業財産権〕なし

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高木 亮 (TAKAGI Ryou)

就実大学・教育学部・准教授

研究者番号：70521996

(2)研究分担者

清水 安夫(SHIMIZU Yasuo)

国際基督教大学・教養学部・上級准教授

研究者番号：00306515

露口 健司(TSUYUGICHI Kenji)

愛媛大学・教育学部・教授

研究者番号：70312139

高田 純(TAKADA Jun)

香川大学・保健管理センター・講師

研究者番号：30647475

藤原 忠雄(FUJIWARA Tadao)

兵庫教育大学大学院・学校教育学研究科・教

授

研究者番号：30467683

波多江 俊介(HATAE Syunsuke)

熊本学園大学・商学部・講師

研究者番号：70733715

(3)連携研究者

(4)研究協力者

長谷 守紘(NGAYA Morihito)